

2018. 11. 13 (火)

いのちの意味

藤井美和

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかわりもないことになる」と答えられた。(ヨハネによる福音書 13 章 1-8 節)

「いのち」とは

私たちは子どもの頃から、「いのちを大切に」とか「みんな同じいのちです」ということを何度も聞いています。しかし、「いのち」とは何を意味するのでしょうか。また、「いのち」はどこにあるのでしょうか？

ゼミの学生に「いのちはどこにあるの？」と聞くと、多くの学生は首をかしげます。おそらく改めて聞かれたことで、それまであまり考えていなかったことに気付くのかもかもしれません。いのちについては「よくわからない」としても、辛い時、苦しい時、自らの

「いのち」を絶ってしまう—それほどまでに苦しむ人がいることは、皆さんよく知っていると思います。そして「いのちを絶つ」というとき、それは「生物としての個体を終わらせる」という以上の意味があるように思います。だからこそ「いのち」を「生きる」こと、あるいは「終わらせる」ことは、私たちにとって大きな問題になるのです。

このようにいう私も、「いのちとは、こういうものです」と明確に言うことは難しいと思っています。しかし苦しみの中にある人が「いのち」を絶ってしまったり、苦難の中でも喜んで「いのち」を生きる人がいることを

思うと、いのちは何らかとの「関係性」の中に存在しているように思います。

関係性の中にある「いのち」—「横の関係」

そこで、この「関係性」について考えてみたいと思います。

家族、友人、仲間。皆さんは、大切な人たちと何らかの関係性を持っています。皆さんがその人たちとの関係を大切にするのはなぜでしょう。おそらくその人が「自分のことを理解してくれるから」「話を聞いてくれるから」「支えてくれるから」「愛してくれるから」といったことだと思います。ですからその人との関係は、自分にとって「プラス」になる大切なものなのです。

では、その友人が心を病んで部活を辞めてしまったり、重度の障がいをもって寝たきりになって大学に来なくなったらどうでしょう。あるいは、支えてくれていた家族が難病になったり認知症になったりして、自分が支えなければならない立場になったらどうでしょう。それでも、これまでと同じように、その人との関係を変わず持ち続けることができるでしょうか。もちろん、そういう人もいますでしょう。けれど月日が経っていくと、自分には自分の生活があり、それをある程度制限して家族や友人のために尽くすことは決してたやすいことではないと思う人もいますでしょう。

今度は逆を考えてみましょう。皆さん自身がこころの病気になったり、障がいをもって寝たきりになったとして、今付き合っている友人は、いつまでも同じようにあなたと関わってくれるでしょうか。もちろんそういう人

もいるでしょう。けれど月日が経つと、だんだんと友人たちが離れていくかもしれません。そんな時、「みんなそれぞれの人生があるのだから仕方ないよなあ」と思う人もいますでしょうし、「結局私って、友だちにとって必要のない人間だったんだなあ」とか「独りぼっちだ、何のために生きているんだろう」と思う人もいるのではないのでしょうか。

このように見てみると、私たちの持つ関係性は少なからず「自分」が中心になっていることが分かります。少し嫌な言い方になるかもしれませんが、相手が自分にとって良い状態のときは喜んで一緒にいるけれど、自分にとって良くない状態、例えば「負担」になってくると離れていく。私たちは、どこまで行っても自分中心であるように思います。このような関係は条件付きの関係性です。状況が変わっても変わることのない無条件の関係性があれば、それは素晴らしいですし心強いものです。しかしそれが難しいということを、皆さん何となく知っているのではないのでしょうか。

今お話ししてきた関係性は、家族や友だちといった目に見える関係性。これは、横に広がる関係、言い換えると「横の関係性」です。

それでは人間関係、横の関係性は、すべて変わりやすく儂いものなのでしょうか。これについては、後で考えてみたいと思います。

「縦の関係」—神の思いによる関係性

関係性には、もう一つ、「縦の関係性」があります。縦の関係性。これは「いのち」を考えると、より明確に見えてくるものです。私は、この縦の関係性を除外して「いのち

ち」を語ることはできない—それほど縦の関係性は大切なものだと考えています。

縦の関係性とは、私たちと人間を超えるものとの関係性、つまり「神と人との関係性」です。皆さんお一人お一人を「いのちあるもの」としてここに置いた、その神様との関係性です。私たちはこの縦の関係性において、「ここに置かれた」と言えます。

考えてみてください。私たちは、なぜ今ここにいるのでしょうか。誰一人生まれることを選択して生まれてきたわけではありません。また誰も生まれる時代や家族を選んで生まれてきてはいません。でもなぜか、今、ここに置かれた。

「縦の関係性」は、人間の思いが入り込めない「神様の思いによる関係性」なのです。では「神の思い」とは何でしょうか。

今日の聖書箇所は、イエスが十字架で処刑される前の夜、弟子たちと食事を共にしたときの場面です。「最後の晩餐」というレオナルド・ダ・ビンチの絵を知っている人もいると思います。

イエスは、自らが十字架にかかることを悟っていて、殺される前の夜、弟子たちと食事をします。そして、食事の席から立ちあがって上着を脱いで、水を汲み、弟子たちの足を洗ったというのです。当時、主人が弟子の足を洗うことなどあり得ないことです。

弟子のひとりペテロは驚いて、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言います。イエスは、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、わかるようになる」と答えています。あまりにも恐れ多いと思ったからか、ペテロはさらに、「わたしの足など、決して洗わない

てください」と言うのですが、それに対してイエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えています。私はここに、イエスと私たちとの関係性が示されていると考えています。

イエスが弟子たちの足を洗ったのは、彼らが自分に従ってきたからでも、優れていたからでもありません。それどころか弟子たちはこの後、イエスを裏切ります。イエスは一人孤独に十字架上で死ぬことを、この時すでに知っていました。それでもイエスは弟子たちの足を洗ったのです。それはなぜでしょう。

もう一度、イエスの言葉を見てみましょう。

「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」

これはイエスの側が、イエスご自身が、「関わる」ことを問題としていたということです。弟子たちが自分を裏切ろうが、売り渡そうが、それはイエスにとって問題ではありませんでした。弟子たちと関わること、そのこと自体がイエスご自身にとっての問題だったのです。では、その背後にあった思いとは何でしょう。

13章1節に「イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」とあります。つまりイエスが私たちともつ関係性は、「プラスかマイナスか」に基づく横の関係性ではなく、相手がどのような存在であれ、ただただ私たちを「愛し抜く」という愛の関係性です。つまり、私たちがイエスの愛に値するかどうかとは関係なく、イエスご自身が私たちを愛し抜くことに

意味があるという関係性。これが無条件に人を愛する神様の「縦の関係性」、つまり神の思いによる関係性です。ですから縦の関係性は、相手の状態によって変化してしまう横の関係性とは根本的に違うものなのです。

聖書に登場するイエスという人は、この縦の関係性—人は無条件に愛される存在であるという縦の関係性—を人間世界、つまり横の関係性に持ち込むために来た人なのです。

「横の関係性」と「縦の関係性」

では、先の問いに戻って考えてみましょう。私たちの人間関係—横の関係性は、変わりやすく、儂いものなののでしょうか。

ここで私の経験をお話させてください。

私は、大学卒業後マスコミに就職してバリバリ働いていました。それこそ夜中まで働くほど忙しい毎日でしたが、やりがいもあり充実感も持っていました。ところがある日、急に頭痛と手の痺れが始まり、3日間で全身麻痺となって救急病棟に運ばれました。その時の状態は、指の一本も動かず、瞬きもできず、目は開いたまま。そして、息もできなくなっていきました。主治医から「藤井さん、どんなことでもするから今晚だけは頑張りなさい」と言われた時、私は死に直面していることを察知しました。その時私の心の底から湧き上がってきたのは、「私の人生は何だったのだろう」という思いでした。あれほどやり甲斐を感じていた仕事のことなど一切出てきませんでした。「何のために生きてきたのだろう」と苦しくて、涙が溢れました。翌日主治医から「藤井さん、もう死にませぬよ」と言われましたが、その言葉は「死なないけれど、一生寝たきりか一年後に車椅子に乗れ

たらよい方だと思ってください」と続いていました。一生寝たきりの私に生きる意味があるのだろうか—そう思うとまた涙が溢れ出しました。

最先端の高度医療を提供する病院で、私は、最後の最後まで治療され苦しみながら亡くなっていく人にたくさん出会いました。隣のベッドの人は点滴や管を抜いて、窓から飛び降りようとしたところで看護師に引き留められました。私は初めて人が死のうとしているところを見ました。全身麻痺の私はそれを止めることすらできなかったのです。また脳腫瘍の人は、家族もなく、痛みも強く、安楽死させてほしいと毎日泣いて医師に頼んでいました。それでも人は生きる、医療は何もできない。全身麻痺の私はこのような世界に半年いました。

しかし同時に、究極的な苦しみの中で、たくさんの尊い出会いも経験しました。

ある看護師は、バイタルをチェックして記録も終えているのに、私のベッドサイドに立ったまま帰りません。どうなさったのかなと目線を上に向けると、その方は血圧計を抱えたまま、「藤井さんつらいね」と涙をこぼし、「でも、神様の力は弱いところに完全にあらわれるからね」と言ってわ〜んと泣かれました。私は日中、初めて涙を流すことができました。今思えば、泣かせていただいたのだと思います。

また、治らない難病を抱えていた同室の患者さんが、ご自身の状態が厳しいにもかかわらず、車いすで私のベッドサイドまで来てくださり、だまって手鏡をかざして外の景色を見せてくださいました。手鏡の中の景色は、私の入院生活の原風景になっています。

母はいつもニコニコして、救急病棟に来て

くれました。毎日楽しい話を一人でしゃべり、おやつを食べ、手を振って帰っていきました。あまりにへらへらして毎日やって来るものですから、帰り際に看護師に呼び止められ、「お母さんは娘さんがどんな病気がわかっていのですか！いつもへらへらして」と怒られました。そのとき母は、「そんなことわかっています。娘がどれほどつらいことか。でも私は娘の病気をどうすることもできません。それは神様に委ねて祈っています。私はただ、娘に会いに来るのが嬉しくて毎日来ています」と話してくれたそうです。これは、母からは聴いていません。妹が後になって教えてくれました。

こういった人たちの関わりは、私が何かできるから友だちである、家族である、という横の関係性とは全く違う関わりでした。動くことすらできない、何もできないこの私を、ありのまま受け入れてくれる、そのような関わりでした。

私は生まれて初めて、「何もない、何も持たない自分」を経験しました。そして同時に初めて、「何もない自分が受け入れられる」という経験をしました。自分のもっている「何か」に拠らず、ただ「無条件に」受け入れられるという経験をしました。これは私の人生にとって最も尊い経験でした。

私はこのような出会いを通して、指の一本も動かない全身麻痺の状態のままでしたが、「生きていいんだ」と思えるようになっていきました。それは「私はここに置かれた人間。意味あって置かれたのだから、必要なものは全て神様が与えてくださる」という確信になっていきました。

この方たちとの関係は人間関係です。しかし彼らが見せてくれたのは利害関係が優先さ

れる「横の関係性」ではありませんでした。私がこの方たちから頂いたメッセージは、「あなたはここに存在するだけで無条件に尊い」というものでした。

「横の関係性」が自分中心としたものである限り、その関係性は確かにむなしいものでしょう。しかし「縦の関係性」を知って人と関わる時、横の関係性は、縦の関係性に近づき変えられていくということだと思えます。

今日読んだ聖書の先、14節には、「あなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」とあります。これは、イエスが私たちに関わってくださったように、私たちも互いに愛し合いなさいということなのです。

イエスのような無条件の愛を私たちは持てるかと言われれば、それはやはり難しいでしょう。しかしイエスが私たちを愛し抜いてくださったその姿から、目の前の友を、家族を、無条件に愛そうとする人間でありたいと心から願うことは出来ます。またどうにもならないこの弱さと限界を神様に委ねて祈りつつ生きることは出来ます。

あらためて「いのち」とは

「いのち」とは何か。はじめに「明確に言うことは難しい」と言いましたが、私は、いのちは、「無条件に愛されるものとして、私たちに与えられたものであり、その確信において、私たちを今ここで生かしてくれるもの」だと考えています。無条件に愛される「いのち」を与えられた私たちです。その「いのち」を受け取り、生き切る、それが私たちに与えられたことなのです。

この世の横の人間関係の中で、どうにもならない孤独や苦しみの中にあるとき、「もうだめだ、生きる意味もない」と、どん底に落ちることもあるでしょう。しかしそのどん底にも神は両手を広げて待っておられて、「縦の関係性」からおっしゃいます。「大丈夫、私はあなたを見捨てない、いのちをここに置いた以上、私があなたを最後まで支える」と。

関西学院大学で過ごす日々の中で、皆さんはたくさんの横の関係性を築いていくことだと思います。しかし私は、皆さんに是非イエスキリストに出会ってほしい、神様の無条件

の愛、縦の関係性を知ってほしいと心から願っています。

〈祈り〉

神様、今日このひと時を感謝します。ここに置かれた「いのち」、あなたに愛される「いのち」を精一杯生きることができるよう導いてください。自分自身の「いのち」と同じく、共に生きる一人一人のいのちもありのまま受け容れ、共に生きていくことができますよう導いてください。主のみ名によって祈ります。アーメン

(人間福祉学部教授)